

むかし、あるところに、アラという名のひとり息子がいました。アラは怠け者で、どうにもこうにもならない親不孝者でした。そこで、お父さんとお母さんは、アラを家から追いだしてしまいました。

アラは、しかたがないので家を出て、あてもなく歩いていきました。

(腹がへってどうにもならん) と思いながら、ある村までやって来ました。アラは、どこか泊めてくれるところがないかと探しましたが、だれも家に入れてくれません。そのうち、村の人が、

「このむこうに、あれた屋敷がある。あそこなら泊ってもいいぞ」といいました。そのあれ屋敷には、今まで何人も泊まったけれど、だれも帰ってきた者はいないということでした。アラは、他に行くところもないので、そのあれ屋敷に泊まることにしました。

屋敷の中はがらんとしていて何もありません。アラは台所の桶の中に入って寝ることにしました。

夜中になると、だれかが奥から出てきたような気がして目が覚めました。桶の節穴からじつとのぞいていると、カラカラと音がして、

「サイデン、サイデン、小僧、小僧」と、男の声がしました。すぐにひとりの小僧が出てきました。すると、声が、

「今夜は人臭いぞ。探してみい」といいました。小僧は、

「いいえ。別に変わりはございません。お引き取りください」といいました。

「そうか」といって、声は消えました。

しばらくすると、また、カラカラと音がして、

「サイデン、サイデン、小僧、小僧」と、女の声がしました。すると、すぐに小僧が出てきました。

「今夜は人臭いぞ。探してみい」

「いいえ。別に変わりはございません。お引き取りください」

声は、

「そうか」といって、消えました。

アラは、

(ほほう。これはおもしろいぞ。こんどは、ひとつ、おれが出てやろう) と思って、桶から飛び出しました。そして、

「サイデン、サイデン、小僧、小僧」とよびました。すると、小僧が出てきたので、アラは、

「おまえにたずねるが、先に出てきたのはだれだ」といいました。小僧は、

「あれは、六部でして、一朱銀の精です」と答えました。

「ふうん。では、次に出てきたのはだれだ」

「あれは、花嫁でして、小判の精です」

「では、小僧、おまえはなんの精なんだ」

「わたしは、穴あきの、ほんの小遣い銭です」

アラが、

「そうか。じゃあ、もう行ってしまえ」というと、小僧は消えました。そこで、アラはまた桶の中に入って寝ました。

つぎの朝、村の人たちは、あの若者はもう死んでいるに違いないと思って、あれ屋敷に行ってみました。すると、アラはびんびん生きていて、昨夜の話をしました。

「夜中に、お金の化物が現れたぞ。一朱銀の精と、小判の精と、小遣い銭の精だ。そこらを探してみるといい」

そこで、みんなで屋敷の中を探したところ、お金がいっぱい出てきました。

この屋敷は、昔たいへんな金持ちのものだったけれど、今ではだれも住まなくなつて、そのお金が、だれにも使ってもらえないので化けて出たんだろうということでした。

おしまい